'94 河合サテライト講座文化講演会

東アジアに吹く新しい風のなかへ

ー日韓の若者による衛星ディスカッションー

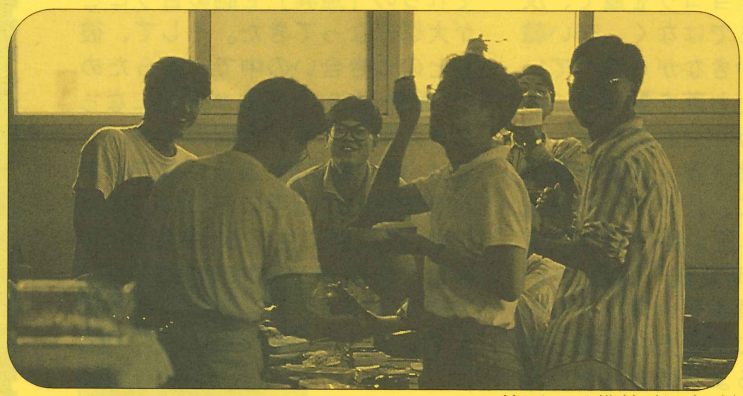
韓国 日本

▲光化門

マス・メディアをとおしてはなかなか見えてこない、変化する日韓の「いま」を生きる若者たちの姿を紹介します。

- ●韓国の若者たちはどのような毎日を送っているのだろうか？
- ●日本のことをどのように考えているのだろうか？
- ●どんな夢をもって勉強しているのだろうか？

「近くて遠い国」と言われ続けてきた隣の国・韓国。しかし現実は、日本を訪れる外国人観光客の第１位が韓国からの80万人。また、韓国を訪れる観光客の第１位は日本からの150万人ーこの数字に示されるように、**日韓の関係はすでに「近くて〈近い〉国」になりつつあります。**



▲韓国の予備校（昼食時）

国境を越える

韓国の大学生・受験生の生の声と素顔を、映像をとおしてお届けします。

◀学生の交流

LIVE

●放映日時

9月10日（土曜日）

15:10～16:40

●会場

各校舎サテライト教室

〈参加無料〉

日韓の最新データ・韓国取材の映像・街頭インタビュー・電話ＦＡＸからのみなさんの意見もまじえてのスペシャル・イベントです。

河合サテライトネットワーク

■主催：河合塾サテライト教育事業部　■共催：河合文化教育研究所

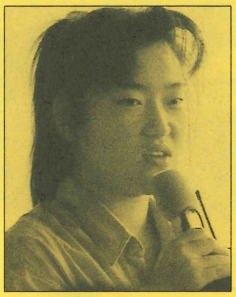
新しい関係を求めて

―スタジオ出演の２人から―

金　善美（キム　ソンミ）

韓国・釜山大学３年
京都大学　日本語・日本文化研修留学生

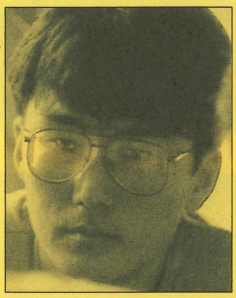
日文科に入って３年生の夏、日本留学の道が開けた。いつも西洋中心の思考方式にこだわっていた私に、自分の国とアジア、また一番近い隣の国である日本を客観的に観察することができる機会が与えられたのだ。この機会こそ自分の内の先入観と偏見がなくなる絶好のチャンスだと思った。しかし、日本人に対しての先入観がある程度解消されたのは日本に来る前だった。日本人、特に日本の若者たちについて何らの予備知識も持っていなかった私にとって大学２年生の夏、韓日大学生交流会の準備のために訪れて来た日本の大学生とのはじめての出会いの機会は今も忘れられない。その男子大学生は私が生まれて初めて会った同じ年頃の日本の大学生であったが、喫茶店に入った時、フルーツパフェに夢中になって、“おいしい！おいしい！”を連発したので思わず笑ってしまった。その時の楽しかった経験は日本を考える時のやや暗いイメージを素朴で明るくて愉快なイメージに変えるきっかけになってくれたし、日本に行ってみても大丈夫だろうなという希望がわいて来たのであった。その後の２回にわたったその交流会―名称を“キンパの会（ちなみにキンパということばは日本語で海苔巻を意味する）”という―での経験は私の日本語に対しての学習意欲を募らせて結果的には日本へ導いてくれたのであった。



河合　英次（カワイ　エイジ）

関西大学　法学部４年

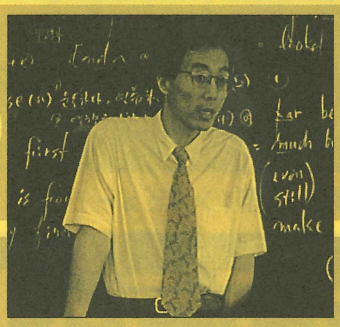
日本人が韓国へ行くときには、多かれすくなかれ「歴史」というものがかなり意識される。「韓国」ではなく、「韓国問題」に興味のある人たちは、この「歴史」を知らずにアジアへ出かけても何の意味もないという。このような話を聞く度に、大きなため息とともに、「歴史」が大きな壁として玄海灘に築かれている気がしてならない。「歴史」というものは、互いの理解を深めるためにあるのであって、もしこの「歴史」が互いの理解しあおうとする好奇心の芽をつむのであれば、これは本来の「歴史」の姿ではない気がする。このような思いから、３年前韓国を旅した。そこには、真っ白なチマチョゴリを着て、反日を叫ぶ人たちではなく、辛い韓国料理を汗をかきながら食べている人に、そっとお茶を酌んでくれるやさしいアガシ（お姉さん）たちがいた。以来３年、何度か渡韓しているうちに、たくさんの友達ができ、韓国と言えば、「従軍慰安婦問題」とか「南北統一問題」といった歴史的事項を思い浮かべるのではなく、その友達たちが真っ先に浮かんでくるようになった。今、彼らとのつき合いの中で、発見されるお互いの相違点、それは時としてその人の個性であったり、あるいは文化、習慣の違いからくるものであったりするわけであるが、それらの「差異」を認め合うことが大切になってきた。そして、彼らとのつき合いの中で、あらためて「歴史」というものが大切になってきた気がする。今回のイベントでは、僕の韓国観、あるいはアジア観を積極的に相手にぶつけ、異文化間、世代間に生じる「差異」を認め合う作業ができたら、と考えている。



韓国のスタジオ

趙　博
（河合塾・英語講師）

日本のスタジオ



竹国　友康
（河合塾・現代文講師）

山崎　瑛二
（河合塾・古文講師）